確認問題

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

山麓のおおらかな自然に包まれて静かに暮らしていると、胸のときめきというものがあることさえ忘れていて、思い出すことも稀である。

けれども、全く思い出すことがないわけではなくて、私は年に二度ずつ、恒例のように胸のときめきを経験している。いちどは、真冬の夜。凍てついた雪に覆われている連峰の主峰が［　　①　　］を浴びてぎらぎらと光り輝くのを眺めたとき。もういちどは、レンゲツツジの堅い蕾が割れてなかの赤い花びらが見えたとき。

この山麓一帯には、レンゲツツジが無数に自生していて、六月の中ごろからそろそろ花を咲かせはじめる。花は、日の当たり具合によって濃淡があるが、まず橙色と赤を混ぜ合わせた炎のような色だと思えばいい。これが、芽吹いたばかりの灌木や笹藪のなかを、野火が走るように点綴する風景は、初夏の山麓では最も美しい彩りである。

ところが、このレンゲツツジの満開期を堪能したという人は、意外にすくない。その年の気象で開花の時期が微妙にずれるからである。満開になるのを待って山荘に一週間も滞在したが、痺れを切らして引き揚げたところ、その翌日に満開になった、などという話をよく聞く。

私自身も、巡り合わせが悪くて、長い間レンゲツツジの満開を見たことがなかった。堅い蕾がひとりでに割れて、なかから懐かしい花の色がほんのり浮き出ているのを見ると、なぜか胸が微かにときめいてくるのをおぼえる。これが花になって咲き切るまでに必ず戻ってこよう、――そう思い固めて帰京するのだが、戻ってみると、大概、咲き疲れた花が残り火のように点々と枝先から垂れているばかりなのである。

去年は、珍しく、②いつもの年よりいちど余計に胸のときめきを味わった。

門――といっても、表面をざっと焔に焙って焼き色をつけた丸太を二本立てただけの簡素なものだが、その門を出入りするたびに、そばの樅の木のむこうで、なんという小鳥なのか、ち、ちち、と危険を知らせるように啼くのを、少々煩わしく思っていたところ、ある日、レンゲツツジの蕾の綻び具合を見るつもりで、樅の木のむこうの笹藪をひと足ひと足漕いでいったら、目の前に小枝でお椀のような形に作った小鳥の巣が一つ、藪のなかに浮かんでいて、しかも、その巣のなかでは、四羽の雛が黄色い口を一杯にひらいて餌をねだっていたのであった。

私は驚いて、せいぜい足音を忍ばせながらそこを離れたが、道へ戻ったときには胸がこれまでになく高く鳴っていた。

あれは、なんという小鳥の雛だったのだろう？　三日ほどして、気になって、そっと覗きにいってみたら、親鳥たちが危険を感じてどこか安全な場所へ移したのか、それとも雛たちが巣立ったのか、巣は空っぽになっていた。

（三浦哲郎「いとしきものたち」より）

注　＊点綴＝物がほどよく散らばってまとまりをなしていること。

(1)　［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　朝日　　イ　日の光
ウ　満月の光　　エ　夕陽

★(2)　――線①「レンゲツツジ」について筆者はどのように感じているか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を文章中から書き抜きなさい。

咲き始めた頃のレンゲツツジについて述べている部分で、その鮮やかな色を［　　］とたとえており、それが点々と散らばっている風景を、初夏の山麓で［　　］だとたとえている。

★(3)　――線②「いつもの年よりいちど余計に胸のときめきを味わった」とあるが、どういうことか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を、㋐は文章中の言葉を用いて四十五字以内で、㋑は五字以上七字以内で考えて書きなさい。

レンゲツツジの蕾の綻び具合を見ようとして笹藪の中を歩いていた筆者が、［　㋐　］を見て驚き、足音を忍ばせてそこを離れたときに、［　㋑　］を覚えたということ。

㋐

㋑

(4)　この文章に表れている筆者の人物像として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　静かな暮らしを愛し、それをさまたげる者を許せない頑固なところのある人物。
イ　自然の豊かな彩りに敏感で、小さな生命にいとしさを感じる人物。
ウ　物事にこだわらず、運命に身を委ねてその時その時を生きている人物。
エ　感情を表現することが不得意で、日常の変化を嫌って淡々と過ごしている人物。

★(5)　この文章で中心に描かれているのは何か。次の文の［　　］に当てはまる言葉を文章中から書き抜きなさい。

［　　］に包まれた暮らしの中で筆者が感じる。

練習問題

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

奈良斑鳩の法輪寺の三重塔再建工事は順調に進み、塔の完成が近づいた。若い大工さんの一人が木材小屋の前でぽつんと立っているのを見かけて、「私」は声をかける。

小屋はいま空です。その空の小屋の前に、若い大工さんがひとり腕組みして、この淋しさはどうしようもねえなあ、といっているのです。このひと、精出して、手塩にかけて、次々と材木を部材に仕上げ、送り出してきたのです。どうしようもないとつぶやく、その淋しさのほどを察して、私もただ立っているのみでした。

「もうじき、別れだね」

およそ建設のことを職とする人は、出来たときが別れなのです。宿命のようなものです。経験を積めば、別れもまた楽しという心境にもなるでしょうが、若いうちは感情が動いても無理はありません。毎日手にふれて刻んで彫った桁柱ですけれど、それらはいまもうこの人の手を必要としないのです。育ち上がって、納まるべきところへちゃんと納まっています。作業中は彼と木材はじかのつながりでしたが、それが、納まり場へ納まったら、もはや明らかに①じかではなくなりました。しかも、そのあとに残っているものは別れだけです。［　　］があるのはもっともだと思います。

このひとが今までに、幾度こういう別れを経験してきているか、私は知りません。若いからおそらく、そう多い経験ではあるまいと思います。この先も一生のうちに、何度出来上がりと別れを、重ねていくのでしょうか。そのうちには②やがて鍛えられて、落成には満足感を、別離はただ、平凡な区切り、としか思わないようになるかもしれません。その頃彼はきっと、いい棟梁になっていることでしょうが、いまの彼はこういいます。

「出来上がると、たいがいの人はまずまあ、めでたい、と挨拶するだろ。それにちがいないけど、③ほんとうの自分の気持ちをいえば、出来上がってしまったということは、あんまりおもしろいもんじゃないね」

彼とこんな話をしたのは、三層目の姿がまとまりかけている頃でしたが、このあと休み時間にそのことが、話にでるようになりました。いやに静かになってきたね、というようにおどけていうひともいますし、次の仕事場さがしをはなす人もいます。聞くともなくちらちら聞く、そんな話の上に感じられるものは、気の引き立たなさです。

着工当時、一人二人と集まってきてくれた時のことを思いあわせると、まるで雰囲気がちがいます。来たときはさわやかでした。いまは萎えてみえます。始めと終わりの差がでているのです。はじめこの人がたの顔はどれも、ひたに塔へ向けられていました。いまめいめい伏し目がちです。心の姿勢の変化がみえているのです。④まぬがれがたい工人の憂鬱でしょうか。でも考えようによっては、悪いばかりじゃありません。愁いは心身をひきしめて、ダレを防ぐ効力があります。

ひと仕事の区切りに、秋風のような愁いがもたらされるのは、きりりとして素敵です。だぶつかないほうが男前です。そしてそれ故に、次の仕事にむかう時、早春の芽吹きのような爽やかさが添わります。一生に何度もその経験がもてるとすれば、それは仕合わせともいえます。

（幸田文「季節のかたみ」より）

★(1) ——線①「じかではなくなりました」とあるが、どういうことか。若い大工と塔の関係の変化に注意して、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　塔の完成が近づくにつれて、着工当時のひたむきな思いが消えて、次の仕事が気になりだしたということ。

イ　自分の手で丹念に仕上げた部材が塔に組み入れられると、自分とは無関係なものに感じられるということ。

ウ　出来上がった塔の姿を見ると、自分が思い描いていたイメージとはまったく違ってしまって残念だということ。

エ　落成式が終わると、完成した塔は人々に尊ばれるが、建設した大工のことは忘れられてしまうということ。

★(2) ［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　寂寥感　　イ　満足感

ウ　爽快感　　エ　悲壮感

★(3) ——線②「やがて鍛えられて、落成には満足感を、別離はただ、平凡な区切り、としか思わないようになるかもしれません」とあるが、これと同様の内容について述べている部分を文章中から三十字程度で探し、初めと終わりの五字を書き抜きなさい。（句読点も字数に含める。）

［　　］～［　　］

(4) ——線③「ほんとうの自分の気持ちをいえば、出来上がってしまったということは、あんまりおもしろいもんじゃないね」とあるが、若い大工はこのときどのような気持ちであったか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　自分が塔の完成にあまり貢献できなかったことに気づき、力不足を悔しく思う気持ち。

イ　自分の今までの苦労が徒労に終わってしまったことを、ばかばかしく思う気持ち。

ウ　塔が完成してしまえば自分はもう必要なくなることを実感し、やりきれない気持ち。

エ　塔が完成してしまえば、他の大工たちとも別れなければならないと、残念に思う気持ち。

★(5) ——線④「まぬがれがたい工人の憂鬱」を筆者はどのように捉えているか。それをまとめた次の文の［　　］あ・い に当てはまる言葉を文章中からあは十六字、いは四字で書き抜きなさい。（句読点も字数に含める。）

仕事の区切りのときの「工人の憂鬱」には［あ　　］があり、次の仕事に向かうときには早春の芽吹きのような爽やかさが添うので、そのような経験が重ねられるとしたら、それは［い　　］なことである。

あ［　　］

い［　　］

総合編 1 論理的文章(1)

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈岐阜改〉

〈パソコンが登場し、いわゆるメール（電子メール）が利用されるようになったとき、①私は手紙とメールの違いに驚いた。手紙は人と人との関係のなかで書かれる。だから相手の立場や気持ちに思いを寄せながら書く。［A］と受け取り手の間に生まれた過去の関係が大事にされるといってもよい。手紙のなかには、過去のすべての関係が蓄積されているのである。

ところがメールになると、自分の伝えたい情報の送信になってしまう。自分の伝えたいことを伝えるだけである。不思議なことにメールだと、受け取る側も情報を知ろうという読み方になって、たまに手紙のような文面が送られてくると読むのがめんどうになってくる。

広告メールのようなものを除けば、メールも人と人との関係のなかで送られている。その点では手紙もメールも同じようなもののはずである。ところが違う。手紙は、たとえそれが頼みごとであったとしても、過去の関係の蓄積をふまえて、自分の思いを伝えることに主目的があるのに対して、メールの主目的は情報の伝達である。［B］は必要な情報だけを受け取り、必要のない情報は読み捨てる。ここでは情報の送信者と受信者という関係だけが成り立ち、必要な情報でなければ、その関係も一瞬にして消える。〉

私は、この手紙からメールへの変化のなかに、現代のさまざまな関係のあり方が象徴的にあらわれているような気がする。たとえば、かつてはお店では［C］と買い手の関係があった。昔からの関係の蓄積を前提にして、店の人と客は会話をし、ときに商品をすすめられながら、客は商品を購入した。だが今日のコンビニやスーパー、量販店では違う。その場かぎりの関係が生まれ、その関係もたちまち消える。つねに新しい関係が一瞬生まれ、消えていくという繰り返しのなかで、私たちは暮らしている。

現在では、私たちを包むあらゆる部分で、このような変化が進行しているのだと思う。関係が希薄化しているとよく言われるけれども、それは正確な言い方ではない。関係が蓄積されていかないのである。あるいは、たえず新しい関係が生まれては、その関係が使い捨てられ、消費されていく世界のなかに、私たちが次第にのみ込まれていったのである。

だから、そういう世界のなかに身を置いていると、使い捨てられないような関係を結ぶことは、めんどうに感じられてくる。地域社会のなかで関係を結ぶことも、ときに家族の関係も、あるいは職場の人間関係や友人同士の関係も、である。②たえず関係を使い捨て消費しながら関係から離れていけることが「自由」の意味になっていく。そういう時代がこうして生まれていった。手紙よりもメールの方が自由な伝達手段と感じる人たちが生まれていったように。

だが、そんな時代も、この一、二年の間に再び変化しはじめた

ような気がする。使い捨てではない、しっかりとした関係を持ちながら生きていきたいと考える人々が、急速にふえてきた。この傾向は若い人ほど大きくて、個人の自立を価値としてきた戦後の日本の社会が、大きな精神変化の時代を迎えたような気さえする。関係を消費しながら生きることが虚しくなり、蓄積されるような関係とともに生きたいと思う時代。この変化が消費の時代をどう変えるのかはまだわからない。しかし、確実に何かが変わりつつあるのである。

（内山節「戦争という仕事」より）

注 ＊希薄化＝薄くなること。

(1) ——線①「私は手紙とメールの違いに驚いた」とあるが、手紙とメールの違いについて述べた一文を〈　〉の中から探し、初めの五字を書き抜きなさい。（句読点も字数に含める。）

(2) ［　］A～Cには、次の①～③の言葉が入る。それぞれに当てはまる組み合わせとして最も適切なものを後から一つ選び、記号で答えなさい。 ［　］

①送り手　②売り手　③読み手

ア （A①　B②　C③）　イ （A①　B③　C②）

ウ （A③　B①　C②）　エ （A③　B②　C①）

(3) この文章の中で、今日のコンビニやスーパー、量販店の例は、どのような役割を果たしているか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。 ［　］

ア かつてのお店とは異なり、関係の蓄積があることを示し、筆者の考えの正しさを証明している。

イ 広告メールとは異なり、情報を多くの人に伝える重要性を示し、筆者の考えの新しさを印象づけている。

ウ 手紙と同じように、相手の気持ちに思いを寄せることの大切さを示し、筆者の考えに独自性を与えている。

エ メールと同じように、関係が蓄積されていかないことを示し、筆者の考えに説得力をもたせている。

(4) ——線②「たえず関係を使い捨て消費しながら……そういう時代」とあるが、筆者は、この時代から、どのような時代に変化してきていると感じているか。文章中から二十五字以内で書き抜きなさい。（句読点は字数に含めない。）

(5) この文章の展開上の特色について述べたものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。 ［　］

ア 経験から導き出した筆者の主張を示し、他者の意見を引用しながら、時代が繰り返されていくことを説明している。

イ 最初に結論を示し、それを裏づける複数の事例を挙げることで、新しい時代と古い時代の対立の深化を説明している。

ウ 身近な事例から考察し、新たに起きている事例を示すことで、時代が少しずつ変化していることを説明している。

エ 異なる三つの事例を比較し、内容を分析することで、若者の多くが消費の時代にのみ込まれていることを説明している。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈鹿児島改〉

環境を絵になる風景という視点で捕えてみると、時間という要素が大きく浮かび上がってくる。環境は三次元としての存在だが、そこに四次元の世界が介在することによって絵になるのではあるまいか。

数十年も前のことになるが、開発などによって取り壊される民家が多いことを知って、今のうちに見ておかないと無くなってしまうという危機感から、民家を訪ねる旅を繰り返していた時代があった。民家研究の第一人者である伊藤ていじ先生に「今度○○に行くので、そのあたりにある民家を教えてください。」と事ある毎に教えていただいていた。先生に「民家を訪れるのは結構ですが、帰ったら必ず礼状を出してください。封書で和紙の便箋を使って筆で書いてください。これは私との約束ですよ。」と諭されて身が引き締まった記憶が今なお新しい。①礼ということの本質を教えていただいた。

民家を見て歩くうちに、目標として見に来た民家よりもみすぼらしくありふれた家々や町並みが絵になる風景をつくり出していることに気づいた。目標とした民家もその風景の中の一要素として絵の中に納まっている。絵の中の風景の家々は複数だが、それらは一度に建てられたわけではない。明治あり大正あり昭和ありという中での合体化現象というより他にない。②この現象は誰かが仕掛けたのではなく、自然の*摂理であり、科学的に言えば風化現象である。時間というものの偉大さを知る。百年という時間の流れは短いのか長いのか、それが定かでない。今という時間は凄まじい速さで過ぎ去ってゆくが、過ぎ去った後は意外にゆったりと堆積してゆくものであるらしい。時間というのは見えないし、手の届かないところにあるようだ。

*青丹よし奈良の都は咲く花の匂うがごとく今盛りなり

と詠われた奈良の都は、恐らくはかなり短い時間に一気に建てられた建築群であったと想像されるが、美しいには美しかろうが、感動を覚える風景ではなかったのではないか。新しいものには生々しさがあり過ぎるからだが、生々しさの正体はそれを造った人間の*情念の生々しさだから、慾のかたまりに見えてしまう。古の奈良の都に在った建物の殆どが消え去り、幾つかの堂塔が残されているばかりだが、生々しさは*疾うの昔に無くなり、風雪に耐えてここまで来たという揺るぎない自信を感動として受け取ることができる。

民家の保存や*修景の仕事をしていると、例えばアルミサッシなど、後補された部分に違和感があるし、腐っていてかなりの部分を新しくすることも多い。出来上がってみると何かしらじらしい感じになっていてうろたえる思いをする。その家が新築された時の姿に戻ると、消え去っていた情念が亡霊のように現れてくるのであろうか。

崩れかけた土塀というのも古都には随所に見られる。絵にしたこともある。［　　］、それを元の形に修復すると、もう絵にする気にはならなくなる。ここにも同じ要素があった。建物の方は造った人間の情念を感じるけれども、土塀などにはあまりそれが無い。時間の経過だけが純粋にあるようだ。③これが時間というものの正体ではないのか。してみると、時間を個人的に捕らえてみると、人間の造ったものは、人間自身、完成したと思っているんだろうが、これから俺が時間をかけて入念に完成してやるのだ。よく見ておけ、ということのように思えてくる。

（吉田桂二「家づくりの知恵」より）

注 *摂理＝自然界の法則。
*青丹よし……今盛りなり＝花が咲き乱れるように、奈良の都は、今美しく輝いている。
*情念＝心にわく感情や思い。
*疾うの昔＝ずっと以前。
*修景＝歴史的景観に調和するよう、家屋などを改修すること。

(1) ——線①「礼ということの本質」とあるが、ここで筆者は「礼」をどのように捉えていると考えられるか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。 ［　　］

ア 相手に対して自分のできる精一杯の誠意を考え、行動すること。
イ 相手に喜んでもらう対応により、自分の思いを満足させること。
ウ 素早い対応を示すことにより、相手からの好意を期待すること。
エ 金銭的な負担をすることで、自分の思いをより大きく表すこと。

(2) ——線②「この現象」の内容を、「それぞれの時代」「風景」の二語を用いて四十字以内で書きなさい。

(3) ［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。 ［　　］

ア そして　イ ところで　ウ だから　エ しかし

(4) 次は、四人の中学生の発言である。——線③「これが時間というものの正体ではないのか」における筆者の考え方と最も近いものを一つ選び、記号で答えなさい。 ［　　］

ア わたしは古代の土器に興味をもっています。当時日常的に使用されていた土器が、時を超えてわたしたちの目の前に現れるとき、その存在感に心を動かされる気がします。
イ わたしは化石を発掘する作業に参加させてもらったことがあります。わたしたちにはるかな時の流れを感じさせてくれる作業は、深い感動と新しい驚きを与えてくれました。
ウ わたしは日本の古典文学をよく読みます。時の流れに風化することなく、現代へと語り継がれてきた作品の数々は、わたしにとって大きな魅力を感じるものだからです。
エ わたしは美術部に所属しています。絵画や彫刻はその時代それぞれに特徴があるといえますが、時を超えてわたしたちに語りかけてくれることに変わりはないと思います。

総合編 7 文学的文章(1)

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈岐阜〉

小学校六年生の「ぼく」（みなと）は、友だちの悟、ユリカと、悟の父親（ジロー）の運転するトラックに乗って北海道を旅している。

いったん国道は陸のほうへ向かい、海から離れた。再び道が海沿いへと戻ってくると、悟とユリカはまたもや「海だ！」をくり返した。ふたりともよっぽど海がうれしいのかと思ったけれど、そうやってはしゃぐのが楽しいのかもしれない。

【右側の笹の山が途切れて、牧草地が広がった。黒い牛が数頭見える。

「牛だ！」

思わず叫んだ。すると、隣のユリカがぼくの顔を見てから、大きな笑みを浮かべて叫んだ。

「牛だ！」

「牛だ！」

悟も続く。それからぼくたちは三人そろって笑った。なにがおかしいのかうまく説明できない。でも、おかしくてしょうがなかった。

やがていくつかのトンネルをくぐり、留萌という街を通った。けっこう大きな街で、電車が走っていた。その街も過ぎて、今度は国道の二三二号線をひたすら北へと走る。苫前、羽幌、初山別といった街を通った。景色はまったく変わらない。左は海で、右は緑の山だ。けれども眺めていてまったく飽きない。見知らぬ国を探検するようなわくわく感で、なにもかも輝いて見えた。】

実を言えば、①ぼくは北海道という土地をわかったつもりでいた。北海道といえば、とにかく雪で真っ白なところ。小学校に上がる前に、お父さんに連れられて見た冬の景色が強烈だったからだ。でも、こうやって自分の足で来てみると、北海道はほかにもたくさんの顔を持っていた。特に五月のいまはイメージがぜんぜんちがう。海の群青色が美しい。大地の緑がまぶしい。空の青が気持ちいい。北海道ってたくさんの色を持った土地だったんだ。そして、それらのすべてが生きている。見える限りのすべてのものが生きている。そのすばらしさに胸がざわざわして叫びたくなる。

「海だ！」とか「牛だ！」だけじゃなくて、目に飛びこんでくるすべてのものを叫びたかった。

こうした景色と出会うことができたのは、悟が今回の旅に誘ってくれたからだ。強引な誘い方だったけど、いっしょに来て本当によかった。ユリカの背中越しに手を伸ばし、悟をつつく。

「ありがとうね。」

「なんだよ、いきなり。なんのお礼だよ。」

「北海道ってすごいね。こんないいところに来られたのは、悟君が誘ってくれたからだよ。」

悟はぷいと窓の方を向いた。

「別におれのおかげじゃないじゃん。みなとが自分の足でここまで来たから見られた景色だろ。礼を言われる覚えはないね。」

②突然、ジローさんが豪快に笑った。

「おい、悟。礼を言われて照れてるんじゃねえぞ。」

「う、うるせえよ。父ちゃんは子供同士の話に首を突っこんでくるなよ。」

「ばーか。大切な話に大人も子供もあるか。せっかくみなとがお礼を言ってるんだから、男らしく受け止めやがれ。」

ジローさんは肩にかけていたタオルを手に取ると、悟に投げつけた。

「なにするんだよ、父ちゃんは。」

すぐさま悟が投げ返す。しかし、再びジローさんが投げ返した。タオルは途中でぱっと広がり、悟の顔に巻きついた。

またすぐに投げ返すだろう。そう思ったけれど、悟はタオルに顔を覆われたまま動かない。

泣いてるんじゃないだろうか。心配になって見守っていると、悟がぼそぼそと言った。

「みなとこそ、ありがとう。」

「え？　なんで。」

「いっしょにここまで来てくれたじゃん。本当の仲間としてさ。」

「そんな、ぼくのほうこそ。」

本当の仲間。なんていい言葉なんだろう。そして、だからなのか、と納得した。

ぼくは友だちを作るのが苦手だ。クラスメイトと会話をするときも、話題に困ったり、どんな口調で話したらいいかわからなかったりして、声が出なくなってしまう。緊張して、おどおどして、変なやつと思われてしまう。相手がひとりなら、まだなんとか会話っぽくなる。けれど、ふたり以上になるともう駄目だ。まったく話せない。

それなのに悟とユリカが相手だと緊張しない。最初はたしかにおどおどしていたかもしれない。でもいまはなんでも口に出せる。言いたいことを言える。胸の中にもやもやしたものを残さないですんでいる。どうしてなのか自分でも不思議だった。

③けど、いまわかった。悟とユリカはぼくの仲間だからだ。本当の仲間だから、なんでも言えるんだ。けんかしたり、衝突したりしたけれども、そういうことがあったからこそ、本心をぶつけられるんだ。

たぶん、人と深く関われば、ぼくはきちんとしゃべれるようになる。いままでたくさん転校して、たくさんのクラスメイトと知り合ったけれど、仲間と呼べるほど親しくならなかった。だから、しゃべれなかった。

「ありがとう、仲間になってくれて。」

タオルをかぶったままの悟に告げる。ユリカがこちらを向き、大きな笑顔を見せた。

（関口尚「はとの神様」より）

(1) 【　】内の表現上の特色として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　〔　〕

ア　擬声語や対句を用いて、自然の中で心を開いていくみなとの様子を表している。

イ　方言や修飾語を用いて、見知らぬ土地に不安を感じるみなとの様子を表している。

ウ　短文や反復を用いて、旅に心を弾ませるみなとの様子を表している。

エ　体言止めや比喩を用いて、海沿いの景色に感動するみなとの様子を表している。

(2) ――線①「ぼくは北海道という土地をわかったつもりでいた」とあるが、「ぼく」はこれまで北海道という土地をどのようなところだと思っていたのに、旅をしているいまはどのような土地だとわかったというのか。次の文の［　］に当てはまる言葉を、「五月」という言葉を用いて、三十字以上三十五字以内で書きなさい。

北海道はとにかく［　］土地だということがわかった。

35
30

(3) ――線②「突然、ジローさんが豪快に笑った」とあるが、このときジローさんは悟の態度をどのように捉えているか。次の文の［　］に当てはまる言葉を文章中から書き抜きなさい。

みなとが悟にありがとうと言ったのに対し、悟は［　］て、ぶっきらぼうに答えたので、ジローさんは、悟が［　］ていると捉えている。

(4) ――線③「けど、いまわかった」とあるが、「ぼく」はいまどのようなことがわかったというのか。次の文の［　］に当てはまる言葉を、「本当の」という言葉を用いて、三十字以上三十五字以内で書きなさい。

「ぼく」は相手がふたり以上になると［　］ということがわかった。

35
30

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　〈都立青山改〉

翌日、ぼくは釣り好きの友だちと一緒に釣り道具屋にいった。軒に細い竹竿が何十本もつられていた。新しい竹で、ねじ曲がったものが多かった。竹竿は安い。子供がおこづかいで買える値段だ。中に一本だけまっすぐで艶のある竹竿があった。これがいい、と店の主人に言うと、それは売り物じゃない、と主人と立ち話をしていた中年の男が言った。

よく見ると、ぼくが選んだ竹竿の先には糸がくくりつけられ、仕掛けもついていた。誰かの持ち物を釣り道具屋が預かっていたようだ。

坊主、と店の主人が言った。他にいいのはないのか？

ぼくは首を振った。目をつけた竿だけがたくさんの竿の中で光っているように見えた。

よし、とうなずいて、白髪頭の主人は竹竿を軒から取ると、しなりを確かめるためか、一度軽く上下に振ってから手渡してくれた。

いいの、と訊くと、いいよ、と店の主人は言った。立ち話をしていた男が驚いたように主人の顔を見た。①主人は無言で左右に首を振った。

よかったな、坊主、と立ち話をしていた男が言った。羨ましそうな口ぶりに聞こえた。

初めてか、と店の主人は訊いた。

うん、とぼくは竹竿を両手でしっかりと持って答えた。でも、友だちの竿を借りてアカマツを釣ったんだ。

それはよかった、と主人は言った。竿は大切に使うんだぞ。

はい、とぼくは答えた。

高い料金を取られるのではないか、と思ったけれど、店の主人は貼り紙に書いてある値段でその竹竿を売ってくれた。

ついている、と思いながら、ぼくは釣り道具屋を出た。もしかすると、ぼくは釣りをするために生まれてきたのかもしれない。

手に入れた竹竿は、友だちの竿に比べても格段に美しく、上等な感じがした。お前の竿は綺麗だな、と釣り好きの友だちも言った。

ぼくは釣り道具屋の主人が好意で譲ってくれた竹竿で、何十匹も魚を釣った。竿のおかげだ。ぼくは釣りに熱中した。将棋のことなど忘れてしまうくらいだった。週末には必ず川で釣りをした。釣果は上がったけれど、アカマツだけは釣れなかった。

新見の家の前には、片側二車線の国道が走っている。国道を渡れば、すぐ川だ。川は国道よりも十メートルほど低いところを流れていた。このあたりは釣りをする橋よりも車が通行する大きな橋よりも上流になり、川幅は変わらない広さを保っているけれど、河原は狭く、ところどころに大きな岩が流れの中にのぞいていた。

新見は自転車にまたがると、釣り竿を肩に担いで、下流の橋を目指して、ペダルを踏んだ。新見の釣り竿は、大人が使うような高級品だった。竹製には変わりがなかったけれど、三つに分解することができる。三つ、つなげると、ぼくの竹竿よりも長くなる。表面には防水処理が施され、漆のような光沢があった。

新見とは釣りをすることが多かった。ぼくたちは誘い合わせて川にいき、橋に並んで座って、あまり話もせずに夕暮れまでの時間をすごすのだ。

新見は驚くほどたくさんの魚を釣った。仕掛けも餌もほとんど

同じものを使っているのに、ぼくの数倍の釣果を上げる。
釣り上げた魚を針から外すと、新見は無造作に川に放り込んだ。どうして持って帰らないのか、と訊くと、釣るだけでいいんだ、とぼそりと答えた。
新見が釣りを楽しんでいるのかどうか、ぼくには判断がつかなかった。魚を釣っても少しも嬉しそうな顔をしない。釣れて当然だと思っているのかもしれない。
最初のうち、ぼくはたくさん釣るコツを訊き出そうとした。けれど、新見は別にコツはないと言うだけだった。
②訊き出せないなら、盗むしかない。
釣りをしながら、ぼくは新見のちょっとした動きも見逃さないように気を配った。
その結果、ぼくは新見が実に細かく錘の位置を調節したり、餌のつけ方を変えたりするのに気がついた。
少しでも*あたりがないと、糸をたぐって、仕掛けをいじる。あたりが来るまで何度もそれを繰り返す。もっと落ち着いたら、と声をかけたくなるほどだ。
じっくりと腰を据えて釣り始めたな、と思っていても、あたりがなくなると、すぐにまた仕掛けをいじり始める。
父親は釣りをすると、気が長くなる、と言ったけれど、それは違う、とぼくは新見を知ってから思った。
ぼくのわずかな経験からすれば、釣りは気の短い人間に向いている。あたりのない時間の長さに耐えられないから、工夫を凝らしてなんとか魚を釣ろうとするのだ。
気の長い人間は、同じ仕掛けで魚を待つ。そのうちに魚がかかるだろうとのんびり構えてしまう。魚は別の場所で餌を漁り、気の長い人間の仕掛けには目を向けない。
その日、新見は仕掛けを川に降ろすと、長い時間川面を見つめていた。あたりがなくても仕掛けを引き上げようとしなかった。
ぼくは二匹の小魚を釣り、二匹とも川に戻した。持って帰るには、あまりに小さすぎる。新見と一緒に釣りをするようになって、ぼくは特別に大きな魚以外、家に持ち帰らなくなっていた。
持ち帰っても食べるわけではない（ウジを食べた魚を口にする気にはなれなかったし、寄生虫の心配もあった）。ただ母親に見せるだけだ。こんなに釣れたの、と最初は驚いていた母親もそのうちに驚かなくなり、迷惑そうな顔をするようになった。川魚をどう処理すればいいのか、わからなかったのだろう。生ゴミと一緒に捨てるにしても、最低一晩は置いておかなければならない。川魚の生臭さに母親は閉口していた。
三匹めの魚が釣れた。
五センチほどの大きさだ。銀色のうろこを光らせて身をくねらせる魚を左手でつかみ、口から針を外す。ぱくりと開けた口の中は薄いピンク色だ。針がかかっていたところから赤い血が流れ出している。
魚を川に投げ込んで、針に餌のウジをつけ、竿を振る。ぽちゃと小さな音をたて、仕掛けは川の中に沈んでいった。
「お前」と新見が川のほうに顔を向けたまま言った。「空を飛んだことがある？」
「ないよ」とぼくは言った。「飛行機に乗らなければ、空なんて飛べないじゃないか」

③ぼくは薄曇りの空を見上げた。梅雨も終わりに近づいていた。もう一雨くれば、空は晴れ上がるに違いない。強い夏の日差しが降り注ぐ空を想像すると、歓声を上げたくなる衝動が胸の奥から湧いてくる。
「飛行機に乗るんじゃないんだ。なんにも使わずに空を飛ぶんだよ、体だけで」
目を向けると、新見はじっと川の流れを見つめていた。滑らかな頬がかすかに赤らんでいる。
（川西蘭「空を飛ぶ夢」より）

注 *あたり＝魚が餌にさわること。

(1) ——線①「主人は無言で左右に首を振った」とあるが、この場面の説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。 〔 〕

ア 男は、自分が欲しかった竹竿を少年が手に入れたので腹を立てたが、主人は「何も言わないように」と男を制し、その竹竿で少年に釣りの楽しさを味わってほしいと思っている。

イ 男は、主人が少年に竹竿を売ったことで自分の言葉が否定されたと感じたが、主人は「そうではない」と男をなだめ、良い竿を見分けた少年にこの竿を使ってほしいと思っている。

ウ 男は、預かり物の竹竿を主人が勝手に少年に売ろうとしたことに驚いたが、主人は「心配はいらない」と首を振り、釣り好きの少年に譲るなら持ち主も納得すると思っている。

エ 男は、売り物ではないはずの竹竿を少年に売ったことに驚き何か言いかけたが、主人は「これでよい」と制し、それを選んだ少年を釣りの先達として温かく見守ろうと思っている。

(2) ——線②「訊き出せないなら、盗むしかない」とあるが、このときの「ぼく」の気持ちを五十字以上六十字以内で書きなさい。

50
60

確認問題（48〜49ページ）

◆ (1) ウ　(2) 炎のような色・最も美しい彩り　(3) あ 例 笹藪に浮かぶ小鳥の巣のなかで、四羽の雛が黄色い口を一杯にひらいて餌をねだっていた光景（42字）　い 例 新鮮な感動（5字）〔新しいときめき（7字）〕　(4) イ　(5) 自然・胸のときめき

●解説●

(1) 「真冬の夜」とあるので、ウが適切。

(2) レンゲツツジの色については「花は、日の当たり具合によって濃淡があるが、……炎のような色だと思えばいい」の一文に着目。レンゲツツジが点々と散らばって咲いている風景については「初夏の山麓では最も美しい彩り」と述べている。

(3) あ ――線②の直後の段落にその出来事が書かれている。「レンゲツツジの蕾の綻び具合を見るつもりで」以降に着目する。門のそばの樅の木のむこうの笹藪を進んでいたら「小鳥の巣が一つ、……餌をねだっていたのであった」とある。文中に「しかも」とあるので、単に藪のなかで小鳥の巣を見つけたことに興奮しているだけではなく、その巣のなかで雛が餌をねだっていた光景に感動していることがわかる。 い 「胸がこれまでになく高く鳴っていた」とあり、毎年二度ずつ味わう恒例のもの以外の、新しい「胸のときめき」であることを押さえる。

(4) まず、「胸のときめき」を感じる情景が色彩豊かに描かれていることを押さえる。また、小鳥の雛を見つけた筆者が「足音を忍ばせながらそこを離れた」とあり、小さな生命に対して思いやりをもって接していることを読み取る。

(5) 筆者が「自然に包まれ」た暮らしの中で、「胸のときめき」を感じた三つの経験について描いている。

練習問題（50〜51ページ）

◆ (1) イ　(2) ア　(3) 経験を積め〜るでしょう（27字）　(4) ウ　(5) あ 心身をひきしめて、ダレを防ぐ効力　い 仕合わせ

●解説●

(1) 「じか」は〝直接。間に隔てるものがない〟ということ。「じかではなくな」ったのであるから、塔に納まった木材と自分とが、隔てられた遠い存在になってしまったのである。

(2) 若い大工の心にあるのは「淋しさ」（2行目）であり、筆者も「その淋しさのほどを察して」（5行目）、「□があるのはもっともだ」と思っていることを押さえる。「淋しさ」と同じような意味をもつのは、アの寂寥感である。

(3) 今は出来上がりと別れが淋しく感じられるが、これから同じ経験を重ねれば、それを「満足感」や「平凡な区切り」と受け止めるようになるかもしれないと言っていることを捉える。これと同じ心境を探すと、「経験を積めば、別れもまた楽しという心境にもなるでしょう」（8〜9行目）が見つかる。「……にもなるでしょう」「……になるかもしれません」という筆者の推量の表現にも着目する。

(4) 出来上がった塔との別れの淋しさゆえに「あんまりおもしろいもんじゃない」のである。ア「力不足」、イ「徒労」とは思っていないので誤り。他の大工との関係の問題ではないから、エも不適切である。

(5) 直後で「でも考えようによっては、……効力があります」と述べていることと、全体のまとめとして筆者の考えが明示されている最終段落の記述に着目して、当てはまる言葉を捉える。

9 詩を読み味わう　問題集▼52〜57ページ

例題（53ページ）

◆ (1) イ　(2) ① ア　② エ　(3) ① 1　② あなた　③ う ウ　え オ

●解説●

(1) この詩で用いられている言葉は現代の言葉である。また、音数に特別な決まりがなく、自由な形式で書かれている。したがって、イ「口語自由詩」と判断できる。

(2) ① 「つき刺さるように」と「ように」を用いて、「あなた」が水面に飛び込む様子をたとえているので、直喩である。

② この三行を普通の語順にすると、「あなたは液体に濡れてさも重たそうに出てくる」となる。語順をかえることで、「あなた」が「出てくる」様子が強調されている。

(3) ① 1行目では、夏らしい入道雲を「花」に見立て、雲の動きを「衣裳が開く」と表現している。

② 2・3行目で、作者の視点は飛び込み台の「あなた」に移動している。4〜8行目は飛び込み台を蹴り、水中に潜っていく様子、9〜12行目は水中から水面に現れるまでの様子が描かれている。

③ う 飛び込む「あなた」を「蜂」にたとえて、その鋭敏な動きを「つき刺さるように」と表現している。

え 11行目「液体に濡れて」から、花の蜜を含んだ「蜂」の姿が連想できる。見事に飛び込みを終えた「あなた」が、「重たそうに」水から出てくる表現から、飛び込んだ瞬間の緊張感とは対照的な様子が感じられる。

確認問題（54〜55ページ）

1 (1) ウ　(2) エ　(3) 初めての位置・初めての高さ（順不同）　(4) エ

2 (1) A カリリッ（4字）　B てのひら（4字）　C 海の香り（4字）　(2) 1・11（順不同）　(3) ① ウ　② 目の前の化〜ている様子　(4) 例 ヒマラヤは深い海の底であった（14字）

●解説●

1 (2) 「待って」と「見て」が対になり、「……いるのではない」、「……しているのだ」と同じような構成で並べている。

(3) 「こどもたちよ」という呼びかけが、「何を」と「おそれてはいけない」の間に、はさまる形になっている。

(4) 鳥が巣から初めて飛び立つ様子にたとえて、子供たちに「初めて」を恐れずに出発すればこそ「わかる」ことがたくさんあると、挑戦の大切さを訴えている。

2 (2) 1行目末の「石」、11行目末の「アンモナイト」は、名詞なので、体言止め。3行目の「カリリッ」は、副詞。

(3) ① 「貝」が「みている」と、人に見立てているので、擬人法。

② 「貝はぼくをみている」とあるので、「ぼく」と「貝」との関係について述べられている部分を探すと、「生き返り」「向き合って」が見つかる。

(4) 鑑賞文の5〜6行目「アンモナイトは、かつて命を持ち、太古の深い海の底で生きていた」に着目すると、ヒマラヤにアンモナイトの化石があったことから、太古においてはヒマラヤが「海の底」であった状況が想像できる。

1 論理的文章(1)

問題集▼130〜135ページ

1 (130〜131ページ)

(1) 手紙は、た
(2) イ
(3) エ
(4) 蓄積されるような関係とともに生きたいと思う時代（23字）
(5) ウ

●解説●

(1) 手紙とメールを比較している一文を探すと、「手紙は、……に対して、メールの主目的は……」という文が見つかる。

(2) 空欄の前後に注目する。Aには「受け取り手」、Cには「買い手」の反対の意味の言葉が入る。Bにはメールの情報を受け取る「読み手」が入る。

(3) 手紙とメールとの違いが、かつての店と今日のコンビニやスーパーや量販店との違いと比較されている。メールとコンビニなどに共通するのは、「その場かぎりの関係」が「一瞬生まれ、消えていく」ということが繰り返され、関係が「蓄積されていかない」点である。

(4) 筆者は現代を、「関係が使い捨てられ、消費されていく」時代、つまり「関係が蓄積されていかない」時代だと分析している。しかし最終段落で、「そんな時代も、この一、二年の間に再び変化しはじめたような気がする」と述べ、関係を消費しながら生きることが虚しくなった結果、人々が「蓄積されるような関係とともに生きたいと思う時代」を求め始めたと述べている。

(5) アは、「他者の意見を引用」「時代が繰り返されていく」の内容が本文にはないので誤り。イは、「最初に結論」とあるが、最初は問題の提示だけなので誤り。エは、「異なる三つの事例を比較し、内容を分析」が誤り。分析されている具体例は「手紙とメール」、かつてのお店と「今日のコンビニやスーパー、量販店」の二つだけ。また、結論部では、若者が消費社会にのみ込まれたという指摘だけでなく、「蓄積されるような関係」を求めようとしている変化についても述べている。正解は「身近な事例」から〝時代の変化〟を説明していると述べているウ。

2 (132〜133ページ)

(1) ア
(2) 例 それぞれの時代の建物が、絵になる風景の一要素として全体の中に納まっていること。（39字）
(3) エ
(4) ア

●解説●

(1) 伊藤先生に言われたのは、「帰ったら必ず礼状を出してください。封書で和紙の便箋を使って筆で書いてください」との言葉。「和紙の便箋」や「筆」を使うという手間をかけることで感謝の気持ちを誠意をもって表すということに、筆者は「礼」の本質を見ている。

(2) 直接指示している部分は、直前の「明治あり大正あり昭和ありという中での合体化現象」。明治以来のそれぞれの時代のさまざまな建物が絵になる風景の一つ一つの要素となって全体の中に納まっている。その点についてまとめて書く。

(3) 空欄の前に「絵にしたこともある」とあり、後には「もう絵にする気にはならなくなる」と逆のことが述べられているので、逆接の接続語「しかし」が正解。

(4) ――線③の直前に、「土塀などにはあまりそれ（＝造った人間の情念）が無い。時間の経過だけが純粋にあるようだ」とあり、この部分の内容が「時間というものの正体」である。人間が造ったものではあっても、土塀などといった存在は、建物と違って人間の情念をあまり感じさせないものであり、それが長年の時間を経て古びていって絵になることに「時間というものの正体」を感じるのである。したがって、アの、古代、日常的に使用されていた何気ない存在であった「土器」を眼前にして感じる古びた存在感が、ここで言う「時間というものの正体」に最も近いといえる。イの「化石」は人間の手によるものではないし、ウの文学やエの美術作品は、「土塀」よりも、むしろ人間の情念を映す「建物」に近い存在である。

3 (134〜135ページ)

(1) 豊かな内容
(2) う
(3) 例 いい文章に必ず備わっている表現上の共通点。（21字）
(4) イ
(5) ア
(6) あ 情報が高い精度で再現
い 自分のそのときの気持ちを最も適切に

●解説●

(1) ――線①の問いに対し、続く二文で、「……考えられない」「……役に立たない」と否定的な案を並べ、さらに「……からである」と、それらを否定する理由を述べている。そして最後に「豊かな内容は……湧き出るのだろう」と、答えとなる考えを述べている。

(2) 脱文が「逆に言えば」で始まるので、脱文の内容である〝すぐれたことばによってすぐれた内容を知る〟ことと同じ意味を逆の言い方で表している文が直前にあると推測できる。それを踏まえてあ〜えを検討すると、うの前にある、「いい内容がいい表現の形で実現し、いい文章になる」の後が適当だとわかるだろう。

(3) 直前部分からまとめる。――線②の「それ」は代名詞なので、直前の「表現上の共通点」につながる一連の表現の部分が答えになる。しかし、「それが……共通点」まで全てを抜き出すと字数がオーバーするので、要約して書く。「である限り」と「必ず」など、類似する表現を繰り返している部分を削るなどして二十字程度にまとめる。

(4) 直後に、「間違いなく相手に伝わるように、次の二点に注意して書くようにしたい」とある。この「二点」とは何かを見ていくと、第一点は、「一つは」に続く「正確に表現すること」、第二点は、「もう一つは」以下にある「わかりやすく書くこと」。選択肢の中でこの二点を含むものを探すと、イになる。

(5) 空欄の直後では、「約一週間の旅行について書くとする」と具体例を挙げているので、ここは「例示」を表す「例えば」が正解。

(6) ここでは「正確さ」を、情報的な正確さだけでなく、自分の気持ちを適切に表すかどうかという二つの視点で述べている。「一週間にも及ぶ」という言い方は、「何日何時間何分何秒」に比べて情報的には不正確であるが、「及ぶ」という表現により「長い」と感じる自分の気持ちを表現できているという意味では正確だということになる。あは「情報」について述べている部分、いは「気持ち」について述べている部分から適切な言葉を探す。

7 文学的文章(1)

問題集▼166〜171ページ

1 (166〜168ページ)

(1) ウ

(2) 例 雪で真っ白なところだと思っていたが、五月のいまはたくさんの色を持った（34字）

(3) ぷいと窓の方を向い・礼を言われて照れ

(4) 例 まったく話せないが、悟とユリカは本当の仲間だから、なんでも言える（32字）

●解説●

(1) まず、一行で収まるような短い文が多いことに着目する。次に、「思わず叫んだ。……叫んだ」「『牛だ！』……『牛だ！』『牛だ！』」「留萌という街を通った。……初山別といった街を通った」と同じ言葉が繰り返されていることを押さえる。このとき「ぼく」は、北海道を旅している。そして、「ぼくたちは三人そろって笑った。なにがおかしいのかうまく説明できない。でも、おかしくてしょうがなかった」とあり、楽しくてしかたがない様子がわかる。さらに、【　】内の最後の一文には「見知らぬ国を探検するようなわくわく感で、なにもかも輝いて見えた」とあり、「ぼく」の弾むような気持ちが表れている。以上から、ウが適切。擬声語や方言は用いられていないのでア・イは不適切。体言止めは文末を名詞で終わらせる表現技法で、ここでは用いられていないのでエも不適切。

(2) 「ぼく」は「小学校に上がる前に、お父さんに連れられて見た冬の景色」の印象から、「北海道といえば、とにかく雪で真っ白なところ」と思い込んでおり、白いイメージが強かったことに着目する。しかし、「五月のいま」見る光景はまったく違っており、「海の群青色が美しい。大地の緑がまぶしい。空の青が気持ちいい。北海道ってたくさんの色を持った土地だったんだ」と、北海道のイメージが変わったことを読み取る。「真っ白なところ」だと思っていたが「たくさんの色を持った」土地だったという色彩の対比がポイント。指定語の「五月」がなければ不可。

(3) 「ぼく」のお礼の言葉を聞いた悟が「ぷいと窓の方を向い」て「別におれのおかげじゃないじゃん。みなとが自分の足でここまで来たから見られた景色だろ。礼を言われる覚えはないね」と言ったことを押さえたうえで、それを聞いたジローの言葉に着目する。ジローは「礼を言われて照れてるんじゃねえぞ」と悟の本心を指摘し、からかうようにさとしている。息子の照れ隠しを見抜いているのである。悟が窓の方を向いているのは「ぼく」の顔を見るのが気恥ずかしいからであり、この後ジローが投げ返したタオルに顔を隠して悟が本心を語っているのも、同様の気持ちからである。

(4) 「ぼく」は、「ふたり以上」の相手に対して「まったく話せない」自分が「悟とユリカが相手だと緊張」せずに「なんでも口に出せ」、「言いたいことを言え」、「胸の中にもやもやしたものを残さないですんでいる」ことに気づいて、どうして「悟とユリカ」に対してだけ平気なのか不思議に思っていた。その疑問に対する答えがわかったのである。――線③の後に「悟とユリカはぼくの仲間だからだ。本当の仲間だから、なんでも言えるんだ」とあり、これがその答えである。「ふたり以上」の相手とは緊張して会話ができないこと、例外的に「悟とユリカ」のふたりには普通に接することができることの二点を捉えていることがポイント。また、「本当の」が指定語なので、これがなければ不可。

2 (169〜171ページ)

(1) エ

(2) 例 新見にコツを教えてもらえないなら、彼の動きをよく観察して、どんな工夫をしているのか見抜いてまねしてやろうという気持ち。（59字）

(3) ウ

●解説●

(1) 店の主人と立ち話をしていた中年の男は「ぼく」が選んだ竹竿について「それは売り物じゃない」と注意しているから、その竹竿について何か知っているのである。だから、主人がその竹竿を「ぼく」に売ったことに驚いて口をはさもうとし、その気配を察知した主人が何も言わないでくれとばかりに首を横に振ったことを読み取る。また、主人が「ぼく」がアカマツを釣ったことを聞いて「それはよかった」と言い、「竿は大切に使うんだぞ」と言い聞かせていること、特別の竹竿らしいのに他の竿と同じ値段で譲ってくれたことには、初心者である「ぼく」に対する温かい配慮が感じられる。男は竹竿を手に入れた「ぼく」に対して羨ましそうな口ぶりではあっても、「自分が欲しかった……ので腹を立てた」とは書かれていないので、アは不適切。主人は特に男を「なだめ」ようとはしていないので、イも不適切。竹竿が「預かり物」ではないかというのは男の様子から「ぼく」が考えたことで、事実だとは述べられていないからウも不適切。

(2) 何を「訊き出せない」のかというと、魚を「たくさん釣るコツ」である。「盗む」というと言葉は悪いが、ここでは他人の技や芸などをひそかにまねして習得するという意味で用いられている。新見は「別にコツはないと言うだけ」なので、それなら彼の行動をよく観察して、どんな工夫をしているのか見抜いてまねしてやろうと思ったのである。この後「ぼく」が、「釣りをしながら」「新見のちょっとした動きも見逃さないように気を配った」結果、彼が魚を釣るために「工夫を凝らして」いることに気づいたという記述に着目する。新見にコツを教えてもらえそうにないこと、そのため、自分で見抜いてやろうと思ったことの二点がポイント。「盗む」の意味がわかるようにまとめること。

(3) このときの新見は「長い時間川面を見つめて」（75〜76行目）おり、いつもと違って「あたりがなくても仕掛けを引き上げようと」せずにいるから、釣り以外のことに気持ちが向いているとわかる。一方、「ぼく」は新見の「空を飛んだことがある？」という問いかけに「ないよ」とあっさり答えており、釣り以外に注意を払っていないことがわかる。この後新見の質問につられて空を見上げた「ぼく」だが、新見とは感じていることが全く異なっているので、ア・エは適切。「もう一雨くれば、空は晴れ上がるに違いない。強い夏の日差しが降り注ぐ空を想像すると、歓声を上げたくなる衝動が胸の奥から湧いてくる」の部分からは夏を待ち望む気持ちが伝わってくるから、イも適切。「ぼく」は釣りのことしか考えていないが、「専念したい」と願うほど新見の話をうるさいと思っていないし、この後新見は「ぼく」の無関心さに関係なく話を続けていることから、「ぼく」が視線を空に向けたことに対して「反発」しているわけではない。よってウが不適切といえる。